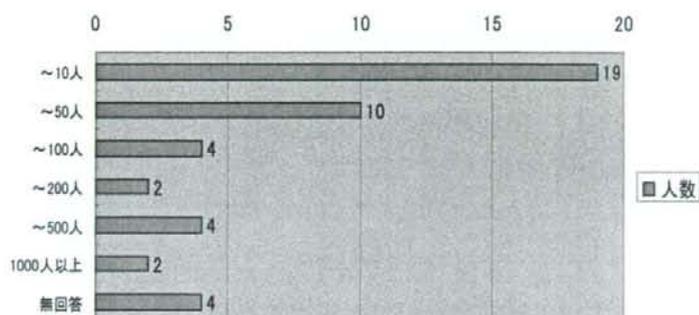
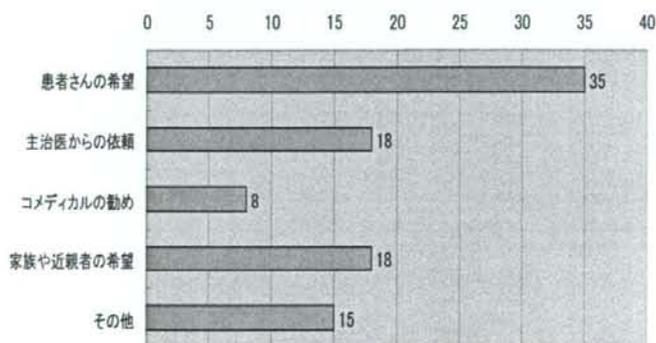


別表-3 「がん患者に鍼灸を適用した日本語論文の著者に対する調査研究報告書」

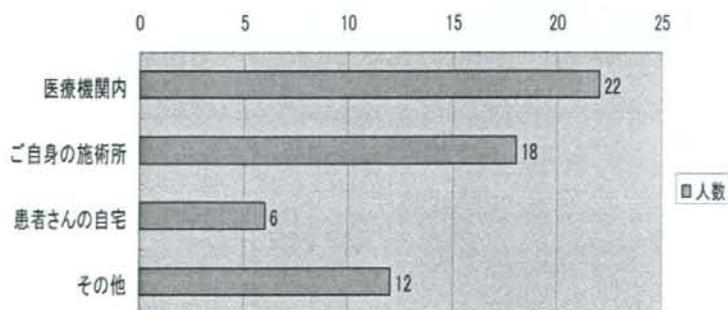
Q1. 今までに何名程度のがん患者さんに鍼灸施術を行いましたか？



Q2. 鍼灸施術を行うきっかけはどのような形で発生しますか？



Q3. 御自身が鍼灸の施術を実践している現場はどのような環境ですか？



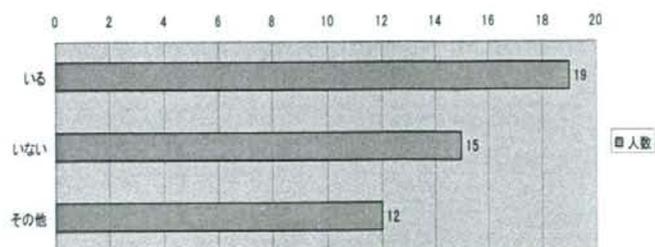
Q4. がん患者さんに対して鍼灸を行う主な目的となるのは次のどれですか？



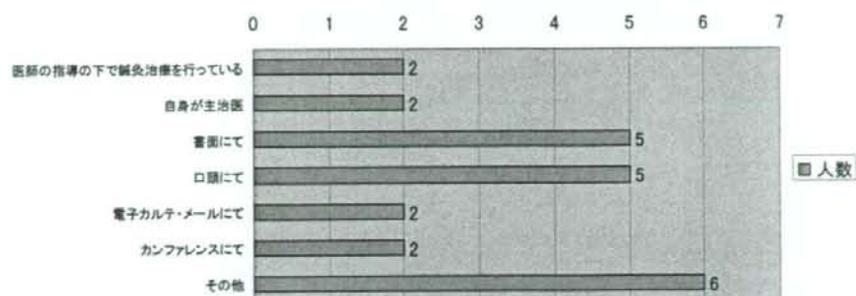
Q5. がん患者さんに鍼灸施術を適用することを決定する際の理由として、考えるのは次のうちどれですか？



Q6. 患者の担当医師と連携をとって鍼灸施術を行っていますか？

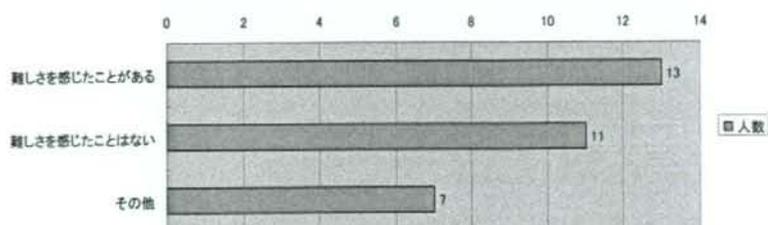


「いる」と答えた方、具体的にはどのように連携をとっていますか？



担

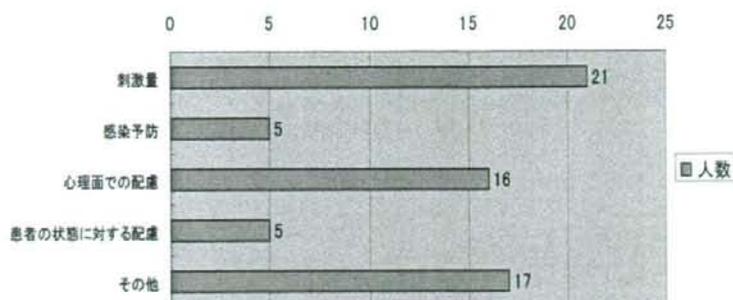
当医師との連絡や申し送りに難しさを感じたことがありますか？



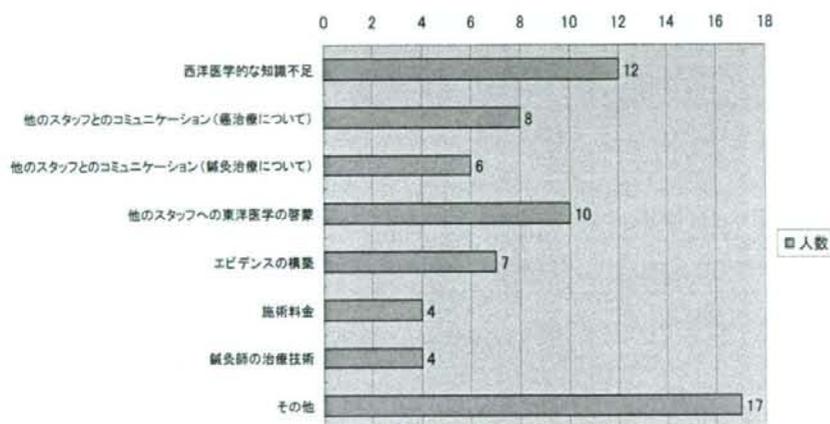
Q7. 鍼灸施術を始める際、がん患者さん及び家族の方や担当医師に対して、鍼灸施術と治療計画についてどのような内容を説明していますか？



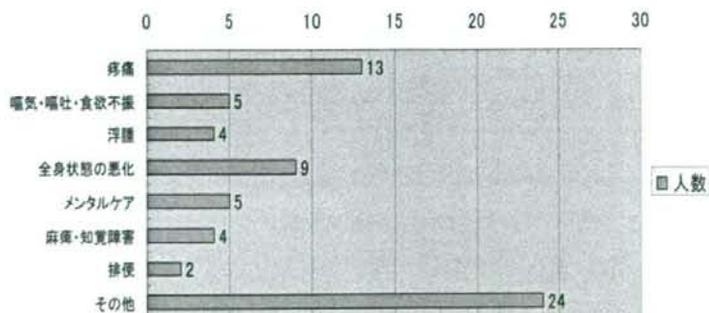
Q8. がん患者さんに鍼灸施術を行う際、施術者として特に注意していることはありますか？



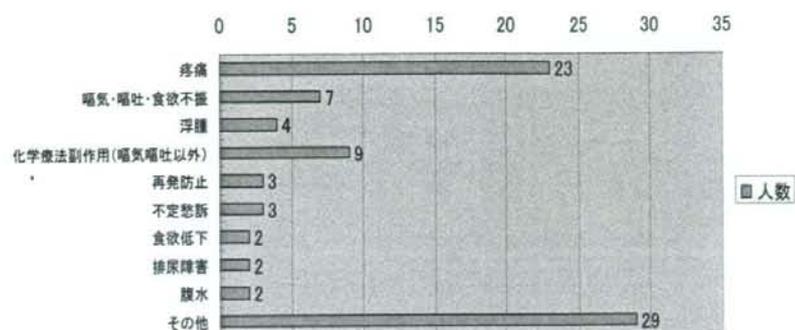
Q9. がんに対するチーム医療の一員に鍼灸師が加わる上での課題には、どの様なものがあるとお考えですか？



Q10. これまでに、がん患者さんに対する鍼灸施術で効果が得難い症状がありましたら、ご記入下さい。



Q11. 鍼灸治療の適用となりうる症状を3つ挙げ、それぞれに対する治療内容についてご記入下さい。



*各適応症状に対する STRICTA に基づいた質問の結果は省略する。

別表-4 「医師に対するインターネット調査 質問票」

Q1. 性別をお答えください。(必須)

1. 男
2. 女

Q2. 年齢をお答えください。(必須)

()歳

Q3. あなたの医師免許取得後年数をお答えください。(必須)

1. 2年未満
2. 2年以上－5年未満
3. 5年以上－10年未満
4. 10年以上－15年未満
5. 15年以上－20年未満
6. 20年以上

Q4. あなたの勤務形態(主な勤務先の勤務形態)をお聞かせください。(回答は1つ)(必須)

1. 病院経営
2. 大学病院勤務
3. 病院勤務(国公立病院)
4. 病院勤務(公的病院)
5. 病院勤務(私立病院)
6. 診療所経営
7. 診療所勤務
8. その他 具体的に:

Q5. あなたの主たる診療科をお答えください。(回答はひとつ)(必須)

一般・総合系(一般内科、家庭医療、総合診療、地域医療など)/消化器内科/循環器内科/呼吸

器内科/感染症科/内分泌内科/代謝内科/糖尿病科/血液内科/腫瘍内科/腎臓内科/神経内科/膠原病・アレルギー内科/心療内科/老年科/リハビリテーション科/小児科/一般外科/消化器外科/呼吸器外科/心臓血管外科/乳腺外科/内分泌外科/人工臓器・移植外科/小児外科/整形外科/泌尿器科/口腔外科/脳神経外科/産婦人科/形成外科/美容外科/麻酔科/集中治療科/救急救命科/ペインクリニック/緩和医療科/眼科/皮膚科/耳鼻咽喉科/放射線科/精神神経科/東洋医学科/その他(具体的に)

Q6. ご勤務されている施設の所在地を都道府県でお答えください。(回答はひとつ)(必須)

都道府県のプルダウン

Q7. あなたは診療業務で、鍼灸師と接触を持ったことはありますか。対面だけでなく、紹介状や電話、電子メールなどでの接触を含みます。(回答はひとつ)

1. ある
2. ない

Q8. Q7 で「ある」と回答した方にお尋ねします。鍼灸師と接触を持つ頻度はどのくらいですか。対面だけでなく、紹介状や電話、電子メールなどでの接触を含みます。(回答はひとつ)

(Q7 で「ある」と回答した方のみ)

1. 週に1回以上
2. 数週に1回くらい
3. 1ヶ月に1回くらい
4. 数ヶ月に1回くらい
5. 半年に1回くらい
6. 年に1回くらい
7. 数年に1回くらい、もしくはそれよりも少ない

Q9. あなたは鍼灸師と接触した際にコミュニケーションに困難を感じたことがありますか。

(回答はひとつ)

(Q7で「ある」と回答した方のみ)

1. よくある
2. 時にある
3. あまりない
4. まったくない

Q10. Q9で「よくある」「時にある」と回答した方にお尋ねします。鍼灸師とのコミュニケーションに困難を感じた具体例についてお答えください。

(Q9で1、2と回答した方のみ)

Q11. 鍼灸師との職務上の接触内容について、経験のあるものをお選びください。(回答はいくつでも)

(Q7で「ある」と回答した方のみ)

1. 鍼灸師からの診断依頼
2. 鍼灸師からの治療依頼
3. 鍼灸師から鍼灸の保険適用に必要な同意書などの発行依頼
4. 鍼灸師への施術依頼
5. 鍼灸師への施術内容・施術計画等に関する問い合わせ
6. 鍼灸によって生じたと思われる有害事象についての問い合わせ
7. その他(具体的に)

Q12. Q11で4と回答した方にお尋ねします。鍼灸師への施術の依頼の目的をなるべく具体的にお答えください。

(Q11で4と回答した方のみ)

Q13. あなたの鍼灸に関する状況は以下のどれに最も近いですか。(回答はひとつ)

1. 鍼灸を自分で実践できる
2. 患者の状況に応じて、鍼灸師を紹介することができる
3. 患者からの鍼灸に関する相談にある程度答えることができる
4. 患者からの鍼灸に関する相談にはあまり答えることができない
5. その他(具体的に)

Q14. 今後、鍼灸を自分の患者に利用してみたいとお考えですか。以下のうち、あなたの状況に近いものをお選びください。(回答はひとつ)

(Q13で1,2,3と回答した方のみ)

1. 利用したいし、実際にすぐにでも利用できる環境にある。
2. 利用したいが、実際にどのようにすれば利用できるか分からない。
3. 利用しようとは思わない
4. わからない

Q15. 鍼灸に関する知識はどのようにして得ましたか。(回答はいくつでも)

(Q13で1,2,3と回答した方のみ)

1. 鍼灸の講習会・セミナーへの参加
2. 鍼灸関連の研究会・学会への参加
3. 鍼灸の専門書によって
4. 鍼灸の専門雑誌によって
5. 医学専門書によって
6. 医学専門雑誌によって
7. インターネット上のWEBサイト
8. その他(具体的に)

Q16. 鍼灸に関するあなたの考えはどの様なものでしょうか。以下の考えのうち、あなたの考えに近いものをお選びください。（回答はそれぞれひとつ）

	そう思う	少しそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
現代西洋医学と異なる技術体系であり可能性や魅力を感じる					
現代科学では受け入れられない理論に基づいており信頼できない					
科学的にも効果、作用機序や安全性が証明されている					
鍼灸は比較的安全な治療法である					

Q17. 鍼灸を自分の患者に適用するのをためらうとしたら、その理由はどの様なものでしょうか。本質問内容に該当しない、もしくは該当項目がない場合は、回答せずに次にお進みください。（回答はいくつでも）

1. どの鍼灸師に患者を紹介してよいのかわからない
2. 鍼灸の適用疾患に関する情報が不足している
3. 健康保険の適用に制限がある（保険診療との併用が出来ない）
4. 健康保険適用の手続きがよく解らない
5. 鍼灸による患者への費用負担が大きいから
6. 鍼灸師の質に疑問がある
7. 鍼灸治療の質に疑問がある
8. その他（具体的に _____)

Q18. 今後、鍼灸治療を適用してみたいと考える症状や疾患などありましたら、自由にお答えください。

別表-4 「医師に対するインターネットアンケート報告書」インターネット調査の回答者数は256名であり、性別は男性が89.5%、女性が10.5%であった。平均年齢は40.7±7.8歳であり、30代・40代が全体の79%を占めた。

医師免許取得後年数は10年以上15年未満が27.7%で最も多く、5年以上10年未満をあわせると全体の50%である。勤務形態は大学病院勤務(24.6%)、私立病院勤務(20.7%)、診療所経営(16.0%)等である。主たる診療科は一般・総合系(30.5%)、消化器内科(12.1%)、内分泌内科(8.6%)等である。勤務先の所在地は東京都(10.2%)、大阪府(10.2%)、神奈川県(8.2%)の順に多い。これまでに診療業務で鍼灸師と接触を持ったことがあると回答したのは72名(28.1%)、ないと回答したのは184名(71.9%)であった。接触を持つ頻度は、数年に1回もしくはそれよりも少ない(33.3%)、半年に1回(20.8%)、年に1回(18.1%)で、週に1回以上は9.7%であった。接触した際にコミュニケーションに困難を感じたことがあるかについては、よくある(16.7%)、時にある(22.2%)、あまりない(48.6%)、まったくない(12.5%)であった。具体例として、専門用語の違い・患者や医師への説明不足・医学的知識の乏しさ等が挙げられた。接触内容は、鍼灸師からの保険適用に必要な同意書などの発行依頼が72名のうちの61.1%で最も多く、次いで鍼灸師への施術依頼が37.5%、他に鍼灸師からの診断依頼、治療依頼等であった。鍼灸師への施術依頼の目的は、患者の希望による紹介、肩こり・腰痛等に対する治療依頼、疼痛緩和等が挙げられた。

鍼灸に関する状況は、鍼灸に関する相談にはあまり答えることができない(79.3%)、ある程度答えることができる(11.7%)、患者の状況に応じて、鍼灸師を紹介できる(4.7%)、鍼灸を自分で実践できる(3.1%)。鍼灸を自分の患者に利用したいかについては、利用したいし、利用できる環境にある(34.0%)、利用したいが、どのようにすれば利用できるかわからない(34.0%)、利用したいとは思わない(22.0%)であった。

鍼灸に関する知識をどのようにして得たかについては、医学専門雑誌(26.0%)、鍼灸の講習会・セミナーへの参加(22.0%)、インターネット上のWEBサイト(22.0%)、鍼灸の専門書、医学専門書等であった。

鍼灸に関する考えは、「現代西洋医学と異なる技術体系であり可能性や魅力を感じる」に対し、そう思う(41.0%)、少しそう思う(20.7%)であった。「現代科学では受け入れられない理論に基づいており信頼できない」に対し、どちらともいえない(37.9%)、あまりそう思わない(29.7%)、少しそう思う(16.8%)であった。「科学的にも効果や作用機序、安全性が証明されている」に対し、どちらともいえない(43.4%)、あまりそう思わない(32.0%)、少しそう思う(14.1%)であった。「鍼灸は比較的安全な治療法である」については、どちらともいえない(41.8%)、少しそう思う(25.8%)、あまりそう思わない(19.1%)であった。

適用をためらう理由は、適用疾患に関する情報不足(63.1%)、どの鍼灸師に患者を紹介してよいのかわからない(57.8%)、鍼灸師の質に疑問がある(43.8%)、鍼灸治療の質に疑問がある(41.0%)、等であった。今後鍼灸治療を適用してみたいと考える症状・疾患として、肩こり・腰痛・慢性疼痛・がん性疼痛・線維筋痛症等が挙げられていた。

別表5 「鍼灸師アンケート質問票」

〈整理番号〉

〈氏名〉先生

以下の質問にお答えください。

回答のスペースが足りない場合には、紙面の裏や、他の用紙をご利用ください。

年齢 _____ 才 性別 男 女

Q1. 先生のお持ちの医療関連資格はどの様なものですか。(複数回答可)

- 鍼師 灸師 あんま・マッサージ・指圧師
医師 歯科医師 薬剤師 臨床検査技師 放射線技師
看護師 保健師 助産師 臨床心理士 作業療法士 理学療法士
言語聴覚士 無し その他 (_____)

Q2. 先生の臨床経験年数をお答えください。(回答はひとつ)

- 臨床経験なし 2年未満 2年以上5年未満 5年以上10年未満
10年以上15年未満 15年以上20年未満 20年以上

Q3. 現在の就労形態は次のうちどれに当てはまりますか?(複数回答可)

- 開業 病院など医療機関勤務 鍼灸院勤務 接骨院勤務
教育機関(常勤) 教育機関(非常勤) その他 (_____)

次のページから、

「A 医師との関係についてお聞きする設問」(p 2～3)

「B がん患者さんとの関わりについてお聞きする設問」(p4)があります。
よろしくご回答願います。

なお、鍼灸臨床を行っていない方は以下の質問にお答えいただかなくて結構です。

A 医師との関係についてお聞きします。

AQ1. あなたは職務上で、医師と接触を持ったことはありますか。対面だけでなく、紹介状や電話、電子メールなどでの接触を含みます。(回答はひとつ)

ある

ない

AQ2. AQ1 で「ある」と回答した方にお尋ねします。医師と接触を持つ頻度はどのくらいですか。対面だけでなく、紹介状や電話、電子メールなどでの接触を含みます。(回答はひとつ)

週に1回以上

数週に1回くらい

1ヶ月に1回くらい

数ヶ月に1回くらい

半年に1回くらい

年に1回くらい

数年に1回くらい、もしくはそれよりも少ない

AQ3. AQ1 で「ある」と回答した方にお尋ねします。医師との職務上の接触内容について、経験のあるものをお選びください。(複数回答可)

医師への診断依頼

医師への治療依頼

医師へ鍼灸の保険適用に必要な同意書などの発行依頼

医師からの施術依頼

医師からの施術内容・施術計画等に関する問い合わせ

医師からの鍼灸によって生じたと思われる有害事象(鍼灸偶発症)についての問い合わせ

その他(具体的に)

AQ4. AQ1 で「ある」と回答した方にお尋ねします。あなたは医師と接触した際にコミュニケーションに困難を感じたことがありますか。(回答はひとつ)

よくある

時にある

あまりない

まったくない

AQ5. AQ4 で「よくある」「時にある」と回答した方にお尋ねします。医師とのコミュニケーションに困難を感じた具体例についてお答えください。

AQ6. 医師へ診断、治療を依頼する際、どのような形でお願いしますか？

AQ7. 医師へ自分の患者の診察を依頼するのをためらうとしたらどのような理由ですか？

(複数回答可)

- 患者が嫌な思いをするのではないか
- 患者が戻ってこないのではないか
- 医師に対し、何を伝えてよいか分からない
- 医師の質に疑問がある
- 現代医療のあり方に疑問がある
- 以前、医師と関わって嫌な思いをしたことがある
(具体的にお願いします。)
- その他

AQ8. 一人の患者を医師とともに治療する、統合医療の体制についてどう思いますか。

B がん患者さんとの関わりについてお聞きします。

BQ1. 今までにどの位のがん患者さんに鍼灸施術を行ったことがありますか？
ない ある _____ 症例程度

以下の質問は、BQ1で「ある」と回答された方にお聞きします。

BQ2. 鍼灸施術を行うきっかけは主に以下のどのような形で発生しましたか？(複数回答可)
患者の希望 病院からの依頼 家族や近親者から要請
その他()

BQ3. がん患者さんを治療する際、御自身が鍼灸の施術を実践しているのはどのような環境ですか？(複数回答可)
治療院内 往診(患者の自宅) 医療機関内
その他()

BQ4. がん患者さんに対して鍼灸を行う主な目的となるのは次のどれですか？(複数回答可)
がん治療に伴う副作用を軽減する手段の一つとして実施。
がん特有の症状を軽減する手段として実施。
がんそのものの治療手段の一つとして実施。
ターミナルケアの一つとして実施。
がん治療と直接関係はしないが訴えを対象として実施。

BQ5. がん患者さんのどのような症状に対して、主に施術されましたか？(複数回答可)
痛み しびれ 吐き気 嘔吐 食欲不振 便秘
浮腫 口腔乾燥症 全身倦怠感 不眠 不安 抑うつ
その他()

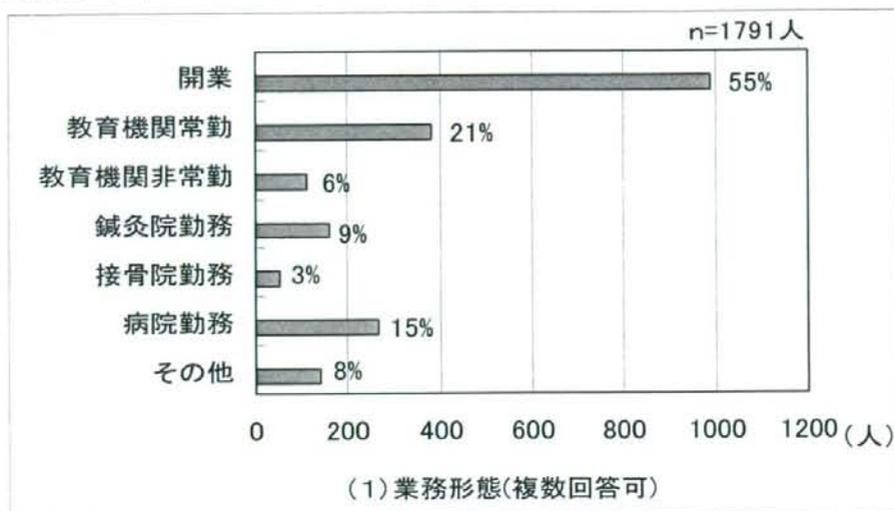
BQ6. がん患者さんに対して治療を行う時に特に注意する事はありますか(例えば刺激量や治療方法や説明など)

以上、ご協力ありがとうございました。

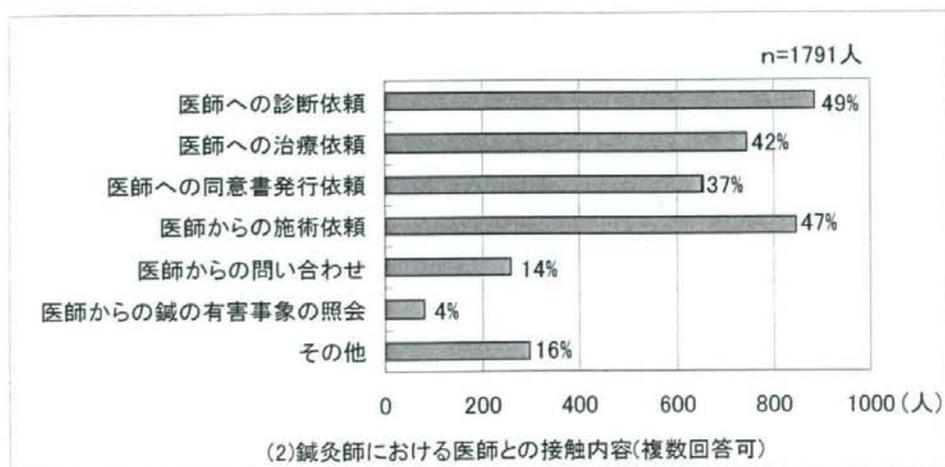
お気づきの点がございましたら、ご記入願います。

別表-5 「鍼灸師アンケート報告書」

対象となった人の所有資格は93%の人が鍼灸師であった。中には医師、その他の医療資格のみ、医療関連資格を持たない人もいた。(1)業務形態に関しては、複数の職場に所属している人が17%いた。複数という意味は2箇所だけでなく3箇所、4箇所を掛け持ちしている場合があり、鍼灸以外の仕事をされている方もいる。

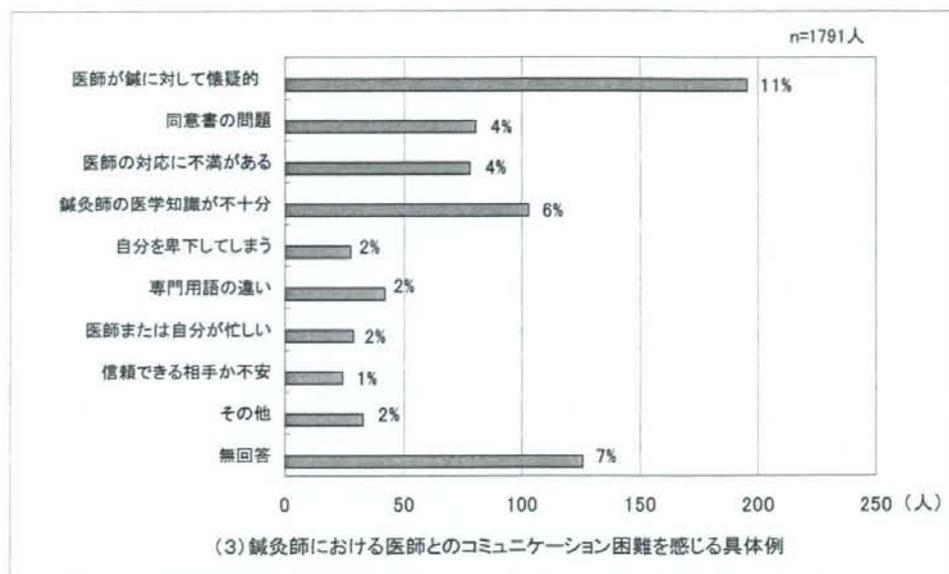


鍼灸師の医師との関係についてみてみると、75%の人が何らかの形で医師との接触経験がある。だが同じ質問に対する医師調査の結果と対比してみると、医師の答えは75%の人が鍼灸師との接触が無いという逆の結果となった。さらに、(2)接触内容も比べてみると、鍼灸師側では診断依頼や治療依頼での接触が多い結果となっているが、医師調査では圧倒的に同意書依頼が多い。鍼灸師と接触のある医師は一部で、鍼灸師はその一部の医師に集中してアクセスしているのかも知れない。



医師との接触頻度を見てみると、接触頻度は頻繁にあるようで、特に鍼灸師から医師へアプローチしている傾向がある。

しかし、(3)医師とのコミュニケーションが困難と感じることが「よくある」「ときにある」と感じている人もいる。それらの人は「医師の態度に不快な思いをした経験がある」「患者を紹介してもその後の連絡がまったく無い」など医師に対する不満を感じているようだ。



* 医師と接触があると答えた人の中で医師とのコミュニケーションに困難をかんじることが「よくある」「ときにある」と答えた人に対して複数回答で答えてもらった。

一方、医師側からすると、「鍼灸師は医学的知識のレベルが低いので患者を任せられない」「東洋医学用語を用いるのでコミュニケーションが困難」という意見もある。医師側の歩み寄りを期待すると同時に鍼灸師側の対応が必要だが、医療環境でチームの一員として働く経験が制約を受けている鍼灸師には困難な課題と言える。

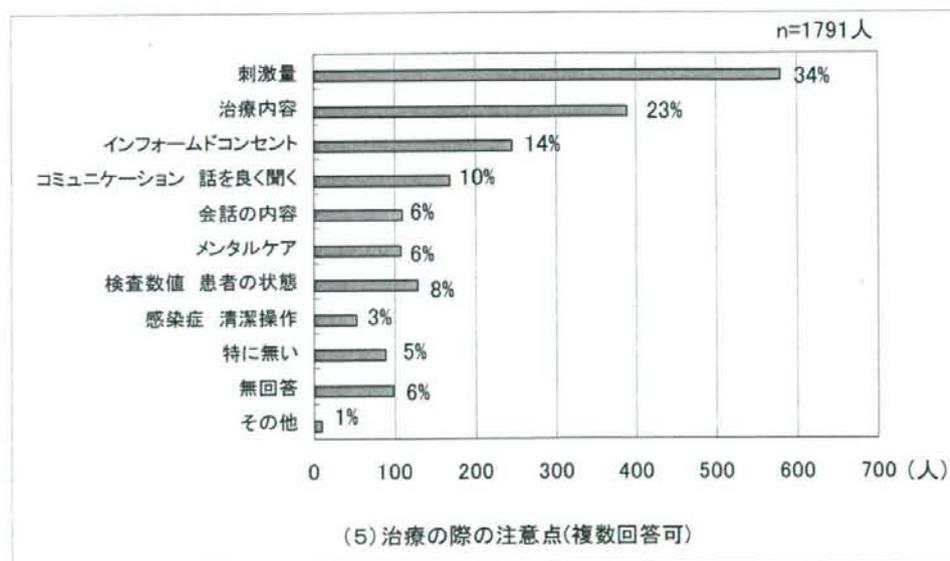
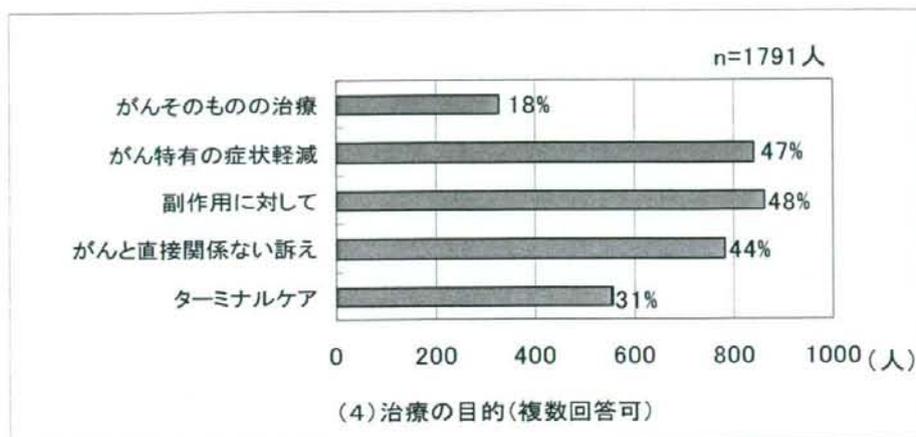
医師との関係が難しいと感じている人がいる中で、統合医療に関してどう考えているのか全ての方に聞いてみた。多くの方は不安を感じながらも賛成していた。今回、この質問の回答を読んで感じたことは、「統合医療」に対する認識が人それぞれ違うようだ。実際、厳密に「統合医療」とはどういったものなのか、その実現には保険の取り扱いを含め越えねばならないハードルが多い。

次に、がん患者への鍼灸治療に関する質問の結果を示す。

回答者の72%に当たる鍼灸師が、がん患者への施術経験があると回答した。その36%の人が10症例前後の経験と回答し、100症例以上経験している者は2%と少ない。がん患者への施術経験のある鍼灸師の勤務形態を調べてみると、圧倒的に開業が多く、病院勤務だからといってがん患者への施術の機会が特に多いわけでは無い。[施術のきっかけ]は、患者本人の意思か、親族や友人たちの勧めによって鍼灸治療を試してみる人がほとんどで、医師や病院からの紹介は少ない。また、元々患者であった人にがんが見つかり、病院での治療と合わせて鍼灸治療も行うというケースも多い。

(4)[治療の目的]も様々で、特に多い目的はなかった。ほとんどの人が患者の QOL 向上に繋がるのであれば何でも行うという方針のようである。

鍼治療の対象症状に関しても、特に突出したものはなく、痛み、痺れ、吐気、全身倦怠など様々な症状に対して治療が行われている。ただ、化学療法や放射線療法による副作用で生じる口腔乾燥症に関しては、6.1%と極端に低かった。



(5)治療の注意点は、身体的な側面として患者が疲れないように刺激量や治療内容に気をつける人や、その一方でメンタル面の配慮に重点を置く人もいる。患者が告知されていない場合も少なくないようで、本人に悟られないように対応する事も注意点として挙げられている。がん患者の中には告知されているが鍼灸師にはその旨を伝えない場合もあるかもしれない。しかし一方で患者に行われている治療における免疫能の低下、清潔操作や検査数値に注目している鍼灸師の割合が少ない。この結果が医学知識の不足による認識不足であれば問題である。また、グラフには示していないが「担当医または家族と連携を取りながら施術する」と明確に示している人は 4%

と少なかった。

現在、がん患者に行われる鍼灸施術は施術する先生によって様々である。患者一人ひとりと向き合うために生じる事であり、これが鍼灸施術のメリットと言える。しかし、今後医療の中で鍼灸施術が行われることを想定したとき、がん患者に対する対応として最低限の知識、対応を統一しておくことも必要なのではないかと考える。

資料 2

プロトコールと付属文書